

# インドの中間層 ——カーストによる固定化?——

辻田祐子



インドの中間層は、どのような人たちで、全人口のどれぐらいの比率を占めるのか。答えは簡単ではない。中間層についての厳密な定義があるわけではないからである。日常生活でインド人の経済階層を判断するときには、居住地、教育レベル、職業、家事使用人の有無などが判断の基準になるだろう。とはいえ、一般的には所得や消費を基準に説明されることが多い。たとえば、インド応用経済研究所(NCAER)の「世帯の市場情報調査」では、年間所得が二〇〇〇万ルピー(約五十一万二千五百円)の世帯が中間層と定義されている。二〇〇五/〇六年時点での中間層は全世帯の約八・一%であった。所得ひとつをとっても中間層の規模にはさまざまな推計があり、全人口の約四分の一程度と見積もる報告もある。

中間層がどのように定義されようと、高学歴でホワイトカラーの

職業につき、一定の購買力を持つ主に都市に住む人々というのが、さまざまな報告から共通して浮かび上がる中間層の姿であろう。インドでは近年の高い経済成長にもなつて今後購買力を持つ中間層のさらなる台頭が予想され、彼らは将来有望な巨大消費市場の希望の象徴となっている。もつとも中間層が注目されるのは、こうした経済的な要因からだけでは、欧米流の文化や生活様式をいち早く取り入れるといった社会的な変容に与える影響や、ヒンドゥー・ナシヨナリストの支持者が多いといった彼らの政治的な発言力の大きさも無視できないからである。

## ●カーストと経済階層

インドの階層を考えるうえで、ひとつ重要な基準となるのが、社会集団、すなわちカーストであろう。カーストと経済階層には相関関係があるようにみえる。都市

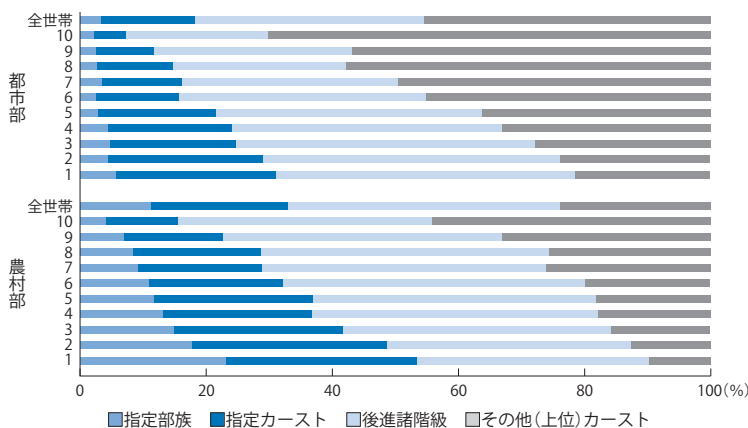
部の一人当たり月額消費支出(二〇〇七/〇八年)は、指定カースト(二一〇〇ルピー)、後進諸階級(二二二ルピー)、その他(上位カースト(一八一七ルピー)であった。現在でもヒンドゥー教において不可触民として差別されてきた指定カースト、隔絶された地域に住み独自の文化を持つ指定部族などの社会の最底辺に位置づけられる世帯は低い経済階層に集中する(図1)。その反面、上位経済階層になるほどその他(上位)カースト、後進諸階級の世帯が増加する傾向がみられる。経済的中间層とは、主に上位カーストからなるといえるだろう。結局、インドの中間層には低カーストに対する参入の障壁がいまだに存在するといつても過言ではない。

## ●中間層が固定化する要因

ではなぜ中間層に低カースト層

が少ないのであろうか。インド国内の経済格差は、一九九一年の経済自由化以降にとくに拡大してきた。中間層と呼ばれる人々の間でも上位中間層と下位中間層の経済格差は小さくない。そして中間層の下には膨大な数の低所得、貧困層が存在する。近年の高い経済成長にともない一人当たり所得の高い伸びがみられるのに対し、貧困削減のスピードは鈍化している。経済階層が低いほど、経済成長の恩恵を十分に受けることができ

図1 経済階層のカースト別構成



(注) 縦軸は一人当たり月額消費支出の最も低い階層(1)から最も高い階層(10)を表す。  
(出所) National Sample Survey 2007-08.



娘の結婚には莫大な費用がかかります。写真はシーク教徒の結婚式（筆者撮影）

いないのである。

こうした状況で経済的に上昇をしていくには、教育、とくに高等教育を受け、よりよい就職を得ることが欠かせないだろう。だが、義務教育の段階から経済階層と子供の通学する学校との関係は鮮明になりつつある。低い経済的階層、とりわけ低カースト層が差別や偏見といった壁を超えて「よい学校」で学ぶ機会は限られている。

カースト制度も中間層を固定化させる要因としてあげられる。カースト集団ごとの職業、食事などにおける排他的な規則や慣習は近代化や都市化にもない緩和されつつある。それでも人々のカースト意識は完全になくなったわけではない。現在でも最もカーストの縛りの強い慣習のひとつに結婚が挙げられるだろう。結婚する人たちが結婚式で初めて会うと

「見合い結婚」は減少しつあるのかもしれない。だが、同じカースト内で年頃の男女の縁談をま

とめ、お互いの相性をホロスコープで確認する形式の見合い結婚が今でも広く行われている。同カースト間の結婚を通じて経済階層を固定化する仕組みが存在するのである。

●中間層が流動化する可能性

経済的な中間層には上中位カーストが大多数を占めており、中間層は何世代にもわたって固定化してきたようにみえる。だが、カーストに基づく身分と経済的な指標を基準とした階層とは必ずしも一致しているわけではない（図1）。経済的な中間層にも下位カーストが少ないながらも存在する。すなわち、下位カーストにも経済的に上昇する可能性が完全に閉ざされているわけではないのである。

では、それはどのように可能なのであるのか。まず、指定カーストをはじめとする低カースト向けの福祉諸政策が（それが対象者に本当に届いているかどうかは別として）ある。また、指定カースト、指定部族、後進諸階級に高等教育や公的雇用で一定比率を優先的に与える留保政策と呼ばれる措置が実施されている。上中位カーストほど留保枠以外の少ない定員枠をめぐる大学入学、公的分野での就職の競争が激化し、低カースト層ではより有利となる。

カースト間の上下関係についても必ずしも固定的なものとはいえない。たとえば、中下位カースト層が菜食主義、禁酒などの上位カーストの習慣を取り入れることでカースト集団の社会的地位を上昇させようとする行動が見られる。今後こうした動きによって中間層と呼ばれるカーストが変化する可能性があるだろう。

また、女性人口比率の低下がもたらす影響も考えられよう。見合い結婚の成立には、一般的に女性側からの持参財（ダウリー）が求められる。法律上、ダウリーは禁止されている。それでもダウリーにまつわる嫁ぎ先でのいじめ、自殺の報道は絶えない。むしろ近年ではダウリーの高額化が進み、もともとダウリーの習慣のなかった南インドなどにも浸透しつつある。中間層では不動産、ゴールド、現金、新車などの「贈り物」も少なくないと聞く。筆者にも、高級外車がこれ見よがしに置かれていた上位中間層の披露宴に出席した経験が何度かある。

中間層を含む多くの家庭では、女兒の誕生は男児ほど歓迎されない。州によっては女兒の誕生、教育にさまざまな補助金を出しているものの、男児に対する女兒の人口比率は低下している。これが地域によってはカースト間の結婚に

も影響を与えているようである。たとえば、女性人口比率の極端に低い北西地域の農村部には、国内のさまざまな地域から低カースト層を含めた花嫁がやってくるようになったという。こうした現象はまだ広大なインドの一部にしかみられないが、将来世代の中間層のカースト構成を流動化させる可能性を含んでいるのである。

近年の高い経済成長は「雇用なき成長」とも呼ばれる。フォーマルセクターにおける雇用の柔軟化や雇用のインフォーマル化が進展し、全労働者の九割以上をインフォーマル・セクターの労働者が占める。国民の全体的な教育水準が上昇するにつれて中途半端な高学歴な者も増え、高学歴失業者の問題も指摘されている。今後、中間層でもホワイトカラー職につけない高学歴者は増加するだろう。現在の上中位カーストが大部分を占める中間層、とりわけ下位中間層が次世代にも中間層である保証はどこにもない。政治的な目的から低カースト向けの政策が次々と謳われるような状況ではなおさらである。中間層からの転落という不安感に苛まれているのも、インドの中間層の姿なのである。（つじた ゆうこ／アジア経済研究所 南アジア研究グループ）